

香川大学における日本語教育 担当教官のアクセントについて

中 井 幸 比 古

要旨 香川大学において、日本語教育担当教官が話している言葉のアクセントに関する素描を行う。

日本語諸方言を母語とする人が共通語アクセントを習得する際に生じる、一般的な問題点や難易度について述べ、その後、各担当教官の母語となる方言別に検討を加える。取り扱うのは、関西中央部のアクセントと香川県高松アクセントなどである。

0. 目 的

外国人対象の日本語の授業において、各担当教官は、おおむね“共通語らしきもの”を話してはいるが、人により程度の差はあるものの、母語となる方言の干渉によって、共通語からのずれが生じるのはやむをえない。とくにこのずれは、アクセントの面で顕著である。そして、このようなアクセントのずれが、日本語学習者の話すアクセントに何らかの影響を与える可能性がある。本稿は、そのための基礎資料として、各担当教官の授業時（改まった学内の会議・くだけた会話なども一部含める）のアクセントについて、ごくおおざっぱな素描を行う。

併せて、日本語諸方言（特に関西中央部方言と香川県高松方言）を母語とする人が共通語アクセントを習得する際に生じる、一般的な問題点や難易度について述べる。

1. 音調記号

音調を表すための記号として、今回は以下のものを用いる。

- 高い自立語の拍
- 低い “

- ◎ 拍内部で急激に下降する自立語の拍
- ▼ 高い付属語の拍
- ▽ 低い “

2. 日本語教育担当教官の母語である方言

香川大学教育学部において、外国人対象の日本語の授業を担当している／したことがある教官を出身地別に掲げると以下のようである。

- ① 兵庫県神戸市出身の専任教官
- ② 京都府京都市出身の専任教官
- ③ 主に横浜市(?)と徳島県(?)で言語形成期をおくった専任教官
- ④ 香川県(高松市?)出身の非常勤講師
- ⑤ 兵庫県神戸市出身の専任教官(すでに転出)
- ⑥ 鹿児島県徳之島出身の専任教官(すでに転出)

いずれも、各出身地の方言が母語であると思われる。

①②⑤は関西中央部の方言のアクセントが母語である。なお、以下において、関西中央部のアクセントを「中央式アクセント」と呼ぶ。これは、歴史的に、関西中央部が日本の「中央」であったことにちなんで、名付けられたものである。

(4節で扱う)

③は、中央式アクセントと東京式アクセントが混じりあっている。(4節で扱う)

④は、香川県のおそらく高松アクセントが母語である。(5節で扱う)

⑥は、徳之島方言が母語である。出身集落未群。(6節で扱う)

以下において、まず3節において、共通語アクセント習得の難易に関して、一般的な記述を行い、その後で、出身地の方言別に、検討を加えていこう。

なお、資料は「自然傍受法」によるが、①③には数分程度の簡単な読む調査にもつきあって頂いた。②は内省によるところが多い。以下、敬称を省く。

3. 共通語アクセント習得に関する一般的な問題点

本節及び4節は、和田実(1959)「関西アクセントの印象」(『音声学会会報』

99), 同 (1961)「大阪」(『方言学講座』3, 東京堂)を参照したところが多い。

3.1 まず、母語のアクセントと共通語のアクセントの対応という観点から問題点の有無をみていく。(1型・無アクセントについては本稿では扱わない)

最も共通語アクセントの習得が易しい場合から考える。例は、中央式アクセントが母語の場合からとる。

「母語のアクセントと共通語アクセントが1対1で対応しており、かつ両者の音調がおよそ一致する場合」がこれに当てはまると思われる。

例: 「ベンチ, ポンプ, マンボ…」など, 3拍の外来語の多くは, 中央式でも共通語でも●○○であるから, 中央式の話者にとって共通語習得は非常に易しい。

3.2 上に次いで易しい場合

「母語のアクセントと共通語アクセントが1対1で対応しているが, 両者の音調は異なる場合」である。

例: 「飲む, 降る, 蒔く」などの動詞は, 中央式で○●, 共通語で●○だから, 中央式の話者は, 「○●を●○に変換」しさえすれば, 共通語になる。

3.3 上に似るが, やや厄介な例

例: 「橋, 石, 音, 川, 足, 犬, 山, 花」など和語の名詞の一部は, 中央式で●○▽, 共通語で○●▽である。ここでも, ●○▽を○●▽に変換すればよい。但しこれは和語についてだけ成り立つもので, 漢語については必ずしも成り立たないし, 外来語についてはまず成り立たない。ところが, ある語が和語かどうかは, 一般人にとって, いつも明確だとは限らない。

3.4 上記3.2とほぼ同じ程度に易しい場合

「母語のアクセントの2種類以上が, 共通語の1種類に対応している場合」を扱う。

例: 中央式(但し若年層を除く)では「何(なに), 針, 船」が○○▼。 「窓, 秋, 雨」が○●▽の2種類があるが, 共通語では, 「何(なに), 針, 船, 窓, 秋, 雨」のすべてが●○▽である。母語の区別をなくし, かつ変換すればよいだけであるから, 易しい。

3.5 習得が困難な場合

まず、「母語のアクセントの1種類が、共通語の2種類以上に対応している場合」。この場合がもっとも多い。

例えば、中央式（一部の周辺地域以外）では、「赤い、遅い、重い」「白い、高い、悪い」のすべてが●○○であるが、共通語（一部若年層を除く）では、「赤い、遅い、重い」は○●●、「白い、高い、悪い」○●○である。このような場合、中央式の話者は、共通語でどの語が○●●なのか○●○なのか、さっぱり見当がつかない。

「対応が不明瞭であったり、例外が多く現れる場合」も困難であると思われる。

3.6 上は、アクセントの対応という観点から考察を加えたが、それ以外にも付け加えるべき事柄がある。

まず、アクセントを変換する際に、その音調型が母語の方言にあれば易しく、なければ難しい。例えば、「飲む、降る、蒔く」は、中央式○●・共通語●○だが、共通語の●○は中央式にもある型だから、変換が容易である。

しかし、「庭、鳥、水」は、中央式で●●▼・共通語で○●▼（句の最初）だが、共通語の○●▼は中央式にはない型だから、変換が困難である。

3.7 語音が関わっている場合については、よくわからない。が、「1対1」や、「母語多対共通語1」ならば、さほど困難はないのではないかと。5節も参照。

3.8 上記3.1節に関連して、共通語と母語のアクセントが同じならば本来習得が易しいはずであるが、「母語のアクセントと共通語のアクセントは高低が何から何まで全部逆だ」という思いこみがあると、ときに変えなくてもよいものまでも変えてしまい、誤りが生じることがある。特にこれは、「関西系アクセント」と共通語アクセントの間にしばしば見られる思いこみである。

もっとも、近頃はテレビの普及で共通語アクセントを聞く機会が多く、このような思いこみは、もはやなくなっただろうと思っていた。ところが、身近に、④からこれを聞く機会があった（5節参照）。また、『香川大学研究報告』1-91（1994）所収の論文P.96表3は、まさにこれに従って図式化されたものであった。少なからず驚いた。

4. 関西中央部のアクセントが母語である教官の場合

4.1 一般に、関西中央部のアクセントを母語とする話者が、共通語を話そうとするとき、体言についてはほとんど問題がない。即ち、3拍くらいまでの短い和語や、一部の慣用久しい漢語は、3.2, 3.3, 3.4のいずれかに該当する。硬い漢語や外来語、長い和語はほとんど3.1または3.2に該当する。

多くの問題が生じるのは用言である。

まず動詞から。終止・連体形のアクセントをあげる。

	中央式	東京式		
2拍1段・5段	●●	—— ○●	寝る・置く	1類
	○●。	—— ●○	出る・書く	2類
3拍1段	●●●	—— ○●●	消える	1類
	○○●。	—— ○●○	建てる	2類
3拍5段	a ●●●	—— ○●●	殺す	1類
	b	—— ○●○	泳ぐ	2類
4拍1段・5段	a ●●●●	—— ○●●●	広げる・広がる	1類
	b	—— ○●●○	集める・集まる	2類

動詞のアクセントは、共通語では長さに関わらず2種類あって、ほぼ安定している。しかし、中央式では、3拍5段以上で、ほとんど1種類になっている。(カッコ内の語はごく少数)。3.5に該当する。

また形容詞も同じである。

	中央式	東京式		
3拍	a ●○○	—— ○●●	赤い	1類
	b	—— ○●○	白い	2類
4拍	a ●●○○	—— ○●●●	悲しい	1類
	b	—— ○●●○	苦しい	2類

そのうえ、共通語では、用言のアクセントは活用形によって交替が著しい。例えば、形容詞について、○●○○○ (赤かった) ; ●○○○○ (白かった) など。

さて、このような困難に直面した場合、どうするか？また、①②⑤は実際ど

うしているか/いたか?

行き当たりばったりで、「時にはa・時にはb」ということもある。しかし、共通語ではa bを比較すると、bのほうが所属語彙が多く優勢である。だから、わからないときはbにしておけば、まあ間違いが少ないだろう、というわけで、bで発音することが非常に多い。

蛇足であるが、アクセント教則本の代表的なものの一つである、田代晃二氏の著作は、この用言のa bの区別に非常に重点が置かれている。これは、あるいは、中央式の話者を主な読者と考えたからだろうか。日本国内において、中央式アクセントの話者数は、東京式アクセントの話者数に次いで多いはずである。

また、3.6に関連して、共通語の句音調の習得もやや難しい。○(●…)●をしばしば、●(●…)●で代用しがちである。また、句音調と「句切り」との関係もやや不明瞭な発音となることが多い。

さらに、3拍(特に4拍)以上の体言の尾高型を平板型で済ませてしまうことが再々ある。これは、中央式には3拍以上に尾高がほとんど欠けていることと、長い東京式の尾高型の語は、中央式との対応がはっきりしないことの、両方が関わる。3.5・3.6を参照。

最後に、3.7の語音との関係について、(イ)共通語では、特殊拍の後に下がり目が来ることが少なく、前にずれることが多い。(ロ)共通語では、無声化した拍の前に下がり目が来ることが少なく、後ろにずれることが多い。一方中央式アクセントでは、このようなズレはない。

このズレの規則は単純であるから、習得はやさしい。しかし、中井は、アクセントの勉強を始めるまでは、(ロ)の現象があることにまったく気付いていなかった。このような場合は、習得が進まないこと、言うまでもない(但し、実際は東京でも、若い人は(ロ)のズレは起こしにくくなっているか)。

4.2 なお、①と②の母語のアクセントには小異がある。

①はやや新しいタイプのアクセントを話す。即ち、「2拍4類名詞(糸・針・船)」の一部が○○▼→○●▽へ変化をはじめている。「2拍5類名詞(秋、雨、窓)」は、単独で○●で、古いタイプの○○◎ではない、付属語つきで○●▽で

あるが、「窓開けた」マドアケタは○○●○○で、古いタイプの○◎●○○などではない。但し2拍4類・5類ともに●○▽は目立たない。

②はこれらの新しい特徴を持っていない。

①は3拍の「男、頭、鏡」の類は、語によって●●○を残しながら、いろいろの方向に変化しつつある。②はほぼ●○○で統一されている。

⑤の詳細は未詳。

なお、場面による使い分けについて、②は日本語の授業以外では母語のアクセントをほぼそのまま使用しているが、①⑤は改まった会議などでは、共通語的なアクセントを使用する。

4.3 ④は、言語形成期を、東京式の地域と関西中央部のアクセントの地域の両方で過ごしたという。そのためもあって、アクセントは両者が混沌と混ざりあっている。いわゆる「読む調査」では、低く始まる（「低起式」の）語がほとんどない。（「垂井式B式からA式」のような様相を示す）。しかし、特に自由な会話においては、低く始まる語もかなりあるようである。内省報告を期待したい。

5. 香川県高松方言が母語の場合

5.1 ①は香川県高松市出身のようであるが、詳細は遺憾ながら未詳。また、この人については、アクセントを十分に観察する時間がなく、漠然とした印象に留まる。

この人のアクセントは、筆者が聞き得た全ての場面において、共通語的なアクセントで話す。しかし、よく観察すると、それほど厳密ではない。例えば、ヒダリ（左）を●○○のようなアクセントで話すことが時にある。これは、先に3.8にあげた、「近畿・四国方言と東京方言はアクセントが逆になる」、具体的には、「高松○（○…）●：東京●○（○…）」という図式を盲信した結果生じた、「過剰矯正」の例であろう。

5.2 ①からははなれるが、高松アクセントの話者が共通語アクセントを習得する場合に生じる問題について、述べておこう。

高松アクセントは世代差・個人差が著しい。詳細は和田実（1958）「複雑な

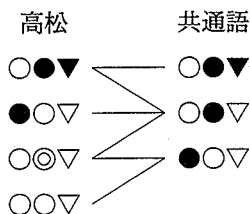
アクセント体系』『国語学』32などを参照。また、中井（1994）「高松方言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』22、中井（1994年3月5日）「高松アクセントについて」（日本語教育学会四国支部第1回発表会で配布のレジュメ）も参照されたい。

現在の中年層（昭和10年前後生まれ）と若年層（現在の大学生）の場合を述べる。

中年層の場合

用言はほぼ共通語と1対1の対応関係にあるので問題は少ない。問題は体言である。

2拍の和語の対応は以下のよう：



問題がないのは○○▼と●○▼だけである。他の○●▼と○◎▼は共通語で二つ以上の型が対応しているから、習得困難であろう。長い単語については、中央式の場合と同じく、問題があまり生じない。

若年層の場合

共通語化の程度に関して、個人差が著しいが、ここでは、現在の若年層の中では比較的保守的なタイプのアクセントを取り上げる。

用言のアクセントについて、中年層では問題がなかった。ところが若年層では3拍5段以上では合流変化がおこり、1種類になっている。共通語アクセントの習得は困難であろうと思われる。以下に変化の実態を示す。

中年層	若年層	語 例	類
●○	●○	着る, 見る, 置く	1段1・2段 5段1類
○○	○○	取る, 書く	5段2類
○◎○	○●○	捨てる	1段1類
○●●	○○○	建てる	1段2類

○○○	→	○●○	当たる	5段1類
○●●	→		動く	5段2類
○○○○	→	○●○○	浮かべる, 転がす	1類
○●○○	→		預ける, 驚く	2類
○○○	→	○●○	赤い	1類
○●●	→		白い	2類

この変化は次の a) b) にまとめられる: a) 語中の◎が●に, b) ○●●の型がなくなり, ○○○または○●○に変化している。

次に, 体言について。長い語にはやはり問題はあまりない。中年層に準じて, 2拍の和語のみをとりあげる。

高松		共通語
○●▼	→	○●▼
●○▼	→	○●▼
(○○▼)	→	●○▼
○○▼	→	

一応中年層と同じだけの型があるが, 若年層では, ○◎▼の所属語彙が非常に少なく, 多くが●○▼となっている。(2類の一部と5類)。人によっては○◎▼がまったく欠けていることさえある。共通語との対応関係は, 中年層と同様, あるいはそれ以上にややこしい。

なお, 和語において, 高松の○●▼は所属語彙が多く, 若い人でも安定している。しかも, それが共通語の二つの型と対応しているから, ここの部分の共通語アクセントの習得は困難であろう。

ところで, 若年層の高松アクセント(母語としての)の共通語化の度合いは, 関西中央部などに比べて, ずっと大きいようである。これは, 対応関係からみた共通語アクセント習得の難易では説明がつかない。高松アクセントに内在する体系のひずみ(上記拙論参照), 方言の力の弱さ, などを考慮しなければならない。

①が「中年層」と「若年層」のどちらに該当するかは未詳である。

6. その他の方言を母語とする教官の場合

⑥の、鹿児島県徳之島出身の人について。この人の場合、名詞の「尾高型」○(●…) ●▽を「平板型」○(●…) ●▽で発音する傾向が非常に顕著であった。共通語でも、とくに4拍以上の語では、若い人では、尾高型を平板型で発音する場合が多い。しかし、この人については、すでに2拍の「石, 川, 山…」なども、しばしば平板化していた。また、時たまであるが、いろいろの語のアクセントが共通語から外れたが、その外れ具合が、関西中央部の出身者にとっては、ちょっと予想がつかないようなものであったと記憶している。

[付記] 本稿(特に5節)は1991年度一般教育部研究活動の成果の一部である。

また、本誌38・39号所収の拙論も、同活動の報告である。

本稿で取り上げた教官以外に、筆者がそのアクセントを観察していないので、取り上げることができなかった、非常勤講師の方が数名ある。

本学において、昭和30年代に賠償留学生?を対象にした日本語教育がなされたことがあるというが、これについては未詳。